

## 「愛媛果試第 28 号」(紅まどんな) の加温ハウス栽培

12 月に出荷される県オリジナル品種紅まどんなは、お歳暮用の贈答商材として高単価で販売されている。作型としては、果皮障害防止対策のため雨よけハウス栽培が普及しているが、今回は新しい作型として加温ハウス栽培について紹介する。

### 1 特徴

紅まどんなの加温ハウス栽培は、3 月上旬から加温を始め、11 月中下旬に収穫期を迎え、雨よけ栽培に比べ 10 日～15 日収穫期が早まる。紅まどんなは「天草」と同様に加温栽培をすることで葉が大きくなり、同化能力が高まることで、果実肥大が促進され、10a 当たり収量は現地ベースで 5t は見込まれる。また、樹上に遅くまで成らせることで十分に味のをせることができ、お歳暮商材の取り扱いが始まる 11 月下旬に、愛媛の中晩柑のトップバターとして出荷できる。雨よけ栽培の果実は、11 月下旬時点ではやや早採りとなるのに対して、加温栽培は酸が完全に抜け、食味の良い果実に仕上がる(図 1)。また、経営面においては加温栽培を取り入れることで、雨除け栽培と労力を分散させることができ、紅まどんなの面積を増加させることができる。



写真 1 収穫時の状態

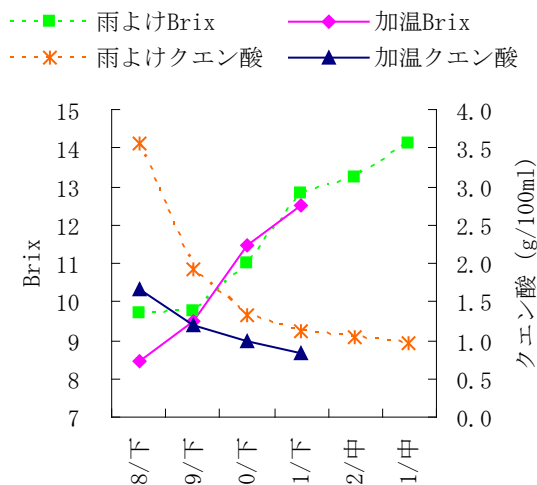


図1 作型の違いと品質の推移  
注) 雨よけは高接樹でH17～19年平均  
加温は苗木樹でH22、23年平均

### 2 栽培管理

#### (1) 温度管理

加温期間は3月上旬～5月下旬となる。最低温度は15～16℃で一定とし、最高温度は、果形に影響する一次生理落果期まで25℃、その後約1週間おきに1℃ずつ昇温し28℃とする。なお、4月中旬以降で日中高温となる時は、換気扇だけでなくフィルムを巻き上げてハウスを開放し、温度を下げる。

#### (2) 着果および水管理

早期に強めの摘果を行い、最終葉果比 90 程度を目安に仕上げる。水管理は、8月上旬まで多灌水とし、肥大促進と夏枝を発生させ樹勢を維持する。中旬以降は節水管理で増糖を図る。

#### (3) 注意点

○屋根面フィルムは、8月中旬以降品質向上と果皮障害防止のため、降雨時には閉め、晴天日は高温防止のため巻き上げる。また、雨水の侵入を防ぐため雨漏れ対策やハウス周辺の排水対策を十分行う。

○着色期以降はアザミウマ類やミカンハダニに被害されやすいので、防除を徹底する。

○加温前には「切り枝水挿し法」により着花を確認する。

(施設土壌班 主任研究員 安部伸一郎)